

研究の全体構想図

保護者や地域
住民の願い

教育目標

進んで学ぶ生徒 『学ぶ』
心の豊かな生徒 『思いやる』
協力し勤労する生徒 『やりぬく』

八王子市特別
支援教育移行
計画

本校の実態

- ・複合的要因によると思われる不登校生徒が多い
- ・非行などの問題行動生徒が多い
- ・コミュニケーション能力が著しく劣る生徒や極端な学力不振の生徒が少ない

特別支援教育の視点から見た本校の課題

- ・支援対象生徒の早期発見手立ての確立
- ・思春期を迎えた時期に、軽度発達障害等があると特定して生徒や保護者の理解を得ることは困難
- ・支援を行うための人材確保、人材を得るための予算の確保が困難

研究主題

公立中学校における特別支援教育の在り方を探る

研究仮説

従来の不適応傾向生徒（非行傾向の生徒、不登校傾向の生徒、学力不振の生徒、コミュニケーション能力が低い生徒など）を対象に、それぞれの生徒が必要と思われる内容の教育支援を進めれば、自らLD（学習障害）、ADHD（注意欠陥多動性障害）、高機能自閉症などの傾向生徒への支援につながるであろう。

研究の内容

1. 教育相談委員会の組織と機能の充実

2. 特別支援教育コーディネーターの専門性の強化

3. 特別支援教室「オアシス」の運営

4. 学習支援教室の運営

5. アセスメントの確立

6. 個別の指導計画

7. オアシス教室での支援

8. 巡回相談の活用

9. 関係機関との連携

10. 第二特別支援教室整備計画

ボランティアによる支援

研究の結果と今後の課題

平成19年度
特別支援教育実施

軽度発達障害の特性と発現

(田中康雄 『軽度発達障害のある子のライフサイクルに合わせた理解と対応：「仮に」理解して、「実際に」支援するために』, 学研, 2006 を参考に作成)

障害名	広汎性発達障害(PDD; 自閉症・アスペルガー症候群など)	注意欠陥多動性障害(ADHD)	学習障害(LD)	軽度の知的障害	発達性協調運動障害
気づきやすい年齢	3歳までに認められる	7歳までに認められる	就学後	乳幼児期	就学前後
特性	<p>社会性の障害(幼児期に目が合わない、親から平気で離れてしまう、人見知りもあまりしないなど) コミュニケーションの障害(言葉の発達の遅れ、おうむ返しをする、冗談や比喻が通じない)</p> <p>想像力の障害とそれにもとづく行動の障害(くるくる回る、手のひらをかざすなどの自己刺激行動、自動車や国旗などの特定のものへの興味、こだわり行動、質問癖など)</p>	<p>多動性(じっとしてられない、しゃべりすぎる)</p> <p>注意散漫(注意力・集中力に欠けること)</p> <p>衝動性(だしぬけになにかをしてしまうこと)</p>	<p>読みの障害(文字や行をとばして読むことが多い、形の似た字を間違ってしまう、音読がうまくできない)</p> <p>書きの障害(わくやマスの中に文字が書けずにはみ出してしまう、漢字のへんとつくりが逆さまになる、小さく書く「っ」「ゆ」「よ」などの入った言葉が正しく書けない)</p> <p>計算の障害(やさしい足し算、引き算でも指を使わないとできない、くり上がり、くり下がり、くり下がりの計算ができない)</p>	<p>発達全般の遅れ、IQ(知能指数)が50~70程度</p>	<p>粗大・微細な運動面の躓き(極端の不器用さ)、手と目、足など複合的な協調運動の躓き</p>
発現率	0.6~1.2%	3~10%	2~10%	1~2%	2~6%
中学校で現われる問題	不登校 友人ができない パニックを起こす	無気力 反抗や非行 不登校 友達ができない	中学校の一斉授業についていけない 不登校		
備考	知的おくれがめだたないものを“アスペルガー症候群”“高機能自閉症”と呼ぶ。	原因は脳の中樞神経系に何らかの機能障害があるらしい。葉が効く場合もある。	ADHDとの合併率が高い(約30%)。全体的な知的能力と比して著しい学習困難が見られる。	学習面において、小学校中学年以降、特に全般的に困難がみられる。	単独で生じることがまれ。

中学生の段階に達すると、軽度発達障害のある生徒を含む生徒が、学校不適応傾向を示す。不登校傾向・非行傾向・友達ができないなどの不適応として現われていることを念頭におきながら、生徒理解や指導を進めることが重要である。